

日本科学哲学会第56回(2023年度)大会シンポジウム

「意識の未来の倫理学」*

オーガナイザー

太田紘史（新潟大学人文学部）

提題者

渡邊正峰（東京大学大学院工学系研究科）

澤井努（広島大学大学院人間社会科学研究科）

太田紘史（新潟大学人文学部）

司会

中澤栄輔（東京大学大学院医学系研究科）

心と脳に関する科学的研究やテクノロジーの開発とともに、意識をめぐる探究はさらなる発展を見せている。そうした発展により、意識の基礎をなす原理や、自然界における意識の分布が解明されつつあるだけではない。むしろ、これまでにはなかった新奇な意識の形態が成立する未来が、いま真剣な検討対象になりつつある。そうしたものの事例は、ヒト幹細胞から培養された神経組織（いわゆるヒト脳オルガノイド）における意識の成立や、高度に複雑化した人工知能や情報処理システムにおける意識の生成、そしてヒト脳から機械内への意識の転送（いわゆるアップローディング）といったものの可能性である。

こうした検討対象の広がりとともに、現在、意識をめぐる倫理的な研究が急速に成長している。かつて意識の哲学と言え、心身問題を代表とする形而上学的な問いがその中心であり、またその探究は意識の科学的研究の進歩とともに「自然化」という大きな流れを汲みながら成長してきたが、それに加えて現在では「倫理化」という大きな流れが現れていると言えるだろう。そこでは、意識の価値や、意識と道徳的地位の関連、意識と実存の関連といったものが真正面から問われ始めている。

今回のシンポジウムでは「意識の未来の倫理学」と題して、上記のような新たな意識の可能性と、それがもたらす倫理学的問題について、ともに検討するための場を設ける。提題者として、意識研究とともにアップローディングに関する先端的な構想を進めてきた渡邊正峰（東京大学）、ヒト脳オルガノイドに関する生命倫理的な研究成果を発表してきた澤井努（広島大学）が登壇し、それぞれの専門研究の観点から話題提供を行う。その後太田紘史（新潟大学）が、それらの提題に関連づけながら、実験倫理的な観点からの話題提供を行う。以上の後に会場参加者とともにディスカッションを行い、この新たな問題圏についてさらに理解を深めたい。

*共催：「ヒト脳改変の未来に向けた実験倫理的 ELSI 研究方法論の開発」（JPMJRS22J4、代表者：太田紘史）。